

体感 アメリカ!

～アメリカに渡った日本人フィッシングガイドとともに～

戸沢村立神田小学校

三 上 真 一

1 はじめに

「先生は、学校のこと以外何も知らない。」私が教員になった20年前にはすでに聞かれた話である。若いころには「なにを！そんなことはない！」と根拠もなく否定していたが、最近になって「やはりそうかな？」などと思うようになってきた。小学校1年生で学校に入って以来、ずっとこれまで学校の中で生きてきたのだから、外の世界を知らないのも無理はない。子どもに語ってやれる話も限られてきたなと感じてきた今日この頃である。

そこへ村教育文化創造研修事業の話をしていただいた。教育分野にこだわることなく、人間の幅を広げるために大いなる研修を……。すばらしい事業である。自分にとってよきチャンスととらえ、すぐに申し込みをさせていただいた。

2 研修概要

- (1) 研修日程 2005年7月30日(土)～8月7日(日)
- (2) 研修場所 アメリカ合衆国 モンタナ州ウエストイエローストーンおよびアイダホ州
- (3) 研修概略 アメリカで活躍する日本人フィッシングガイドの仕事ぶりおよび生き方から自分の生き方を考えるとともに、アメリカの自然や人、英語に触れる。

3 研修内容

(1) 日本人フィッシングガイド シミー大森(大森 一)

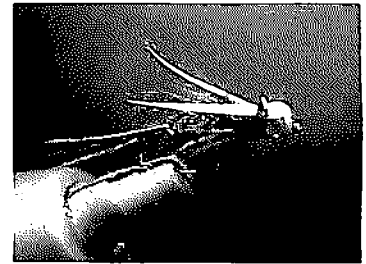
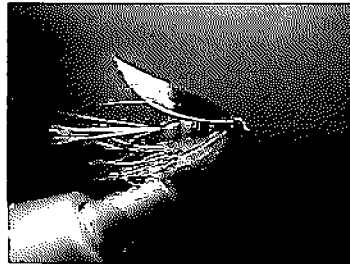
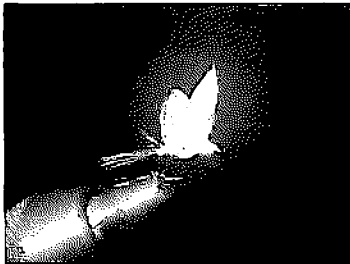
今回の研修でお世話になった日本人フィッシングガイドのシミー大森は、1963年9月13日、東京都に生まれた。彼は、幼いころより釣りに親しんできた。独協大学在学中、コンピュータプログラマーの就職が内定していたが、かねてよりフライフィッシングに関係した仕事をしたいと思っていた彼は、作家開高健にその旨を記した手紙を送った。そこで、カナダでのガイドを紹介されたが、釣りがあわずにコロラド州の釣り宿を自ら探し、ガイドの職についた。釣りシーズンにはガイドをするかたわら、写真を撮ったり、宿の掃除をしたりして生活していたが、冬にもスキーのインストラクターをするようになり、1年を通してアメリカにいたようになった。家庭は裕福であったそうだが、親からの仕送りを一切もらわず、自力で生活をしていったそうである。アメリカに渡ったときの所持金は、わずか5万円程度であった。単身アメリカに渡り、志を貫いた彼の人物は、一緒にいた1週間に幾度となく感じる事ができた。自分にはない強さを感じさせる人物であったと思う。



(2) フライフィッシングについて

ジミー大森を含めたウエストイエローストーンのフィッシングガイドといえば、当然のごとくフライフィッシングガイドを指す。フライフィッシングは、イギリスで生まれたスポーツフィッシングである。最近では日本でもフライフィッシング人口は増えてきているが、まだまだマイナーな釣りである。簡単に釣り方を紹介する。

- ☆ 対象は、ほとんどすべての魚であるが、主に日本では、イワナ、ヤマメ、ニジマス、イトwanaなどで、アメリカではニジマスとブラウントラウトが主となる。
- ☆ 道具は、ロッド（竿）、リール、ライン、フライ（毛ばり）であるが、他の釣りに比べてラインが重く、その重さを利用して、毛ばりを魚の近くまで飛ばす。
- ☆ フライ（毛ばり）は、鳥の羽や動物の毛でできており、魚に捕食されるほぼすべての虫に似せて作られる。
- ☆ 捕食される虫は、地域、季節、天候、水温、時間帯などによって異なる。
- ☆ フライフィッシングの面白さは、にせものの虫（フライ）をうまく流れに乗せて、いかに食べさせるかという、人と魚の知恵比べにあるといえる。



(3) 「フィッシングガイド」という仕事

日本でも最近、北海道などで見られるようになってきたフィッシングガイドであるが、まだまだ認知されていない職業である。（本業がペンション経営や釣具店経営である場合が多い）しかし、アメリカ、ことモンタナ州やアイダホ州ではとても人気の高い職業である。ウエストイエローストーンでは、およそ300人の人間がガイドとして生計を立てているそうである。なぜこのようにガイドという職業が成り立つのか。それはとりもなおさず、ゲストの要求を満たす素晴らしい川がたくさん近くを流れているからである。フライフィッシングの世界では、マディソンリバー、イエローストーンリバー、ヘンリーズフォークリバーと言えは垂涎ものの川であり、フライフィッシャーであれば1度は行ってみたいと思う川である。シーズンになれば、世界中のあちらこちらからたくさんのフライフィッシャーがここやってくる。短い滞在期間の中で満足する釣りをするためには、ガイドがどうしても必要となってくるのである。

ガイドという仕事は、特に資格とかガイドになるための試験などといったものはないそうである。州が認可（試験あり）しているアウトフッター（ジミー大森の場合、釣具店オーナーのポップジャクリンズ）に雇われて、仕事をしているのである。ただし、釣りに使用されるボートの操縦は、150～300時間の操縦経験と試験によって許可されるのだそうである。

【ガイドの主な仕事】

- ① ゲストの要求に応える。（大きな魚を数多く、ドライフライで。マイフライで。マッチングザハッチなどで・・・。）
- ② 川の選択（釣り人の技量や最近の魚の出方などから、安全かつ楽しめる川を選択）

- ③ 情報収集（自分の足で探したり、ガイド仲間との情報交換で）
- ④ 移動手段の提供（ポイントまでの車での移動）
- ⑤ 昼食の手配
- ⑥ プランの提案
- ⑦ ライセンスの購入（それぞれの川ではお金を支払ってライセンスを取らなければならない。）
- ⑧ 魚を見つける
- ⑨ フライの選択と使い方のアドバイス（捕食されている虫や羽化している虫などから）
- ⑩ その他（キャッチングや写真撮影など）

（４）訪れたすばらしい川

先に述べたように、私が滞在したウエストイエローストーンから、車で1時間の範囲にはたくさんすばらしい川がある。どの川で釣っても同じではないかと思われるかもしれないが、川によってそれぞれの特長や楽しみ方があるのだ。ではどのような川なのか印象を述べてみたい。



■ マディソンリバー（モンタナ州 地図北西部）

川幅20m以上で、水量も豊富。とにかく大きな魚がたくさんいた。また、ボートに乗って釣り下る「フロートトリップ」のできる川でもある。青く広い空の下を流されていくだけで素晴らしい気分を味わえる、まさにここでしかできない釣りである。



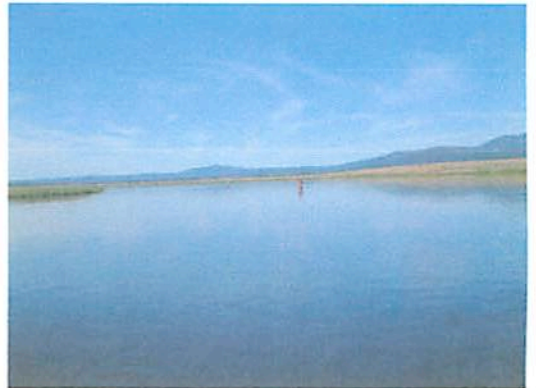
■ イエローストーンリバー（モンタナ州 地図北東部）

世界で1番古いイエローストーン国立公園内を流れる。日本の溪流に似た様相で、カットスロートとよばれる珍しいマスが釣れる川である。公園内には野生動物も多く生息し、訪れた日にも白頭鷺やエルク（日本の牛より大きい鹿）も見ることができた。



■ ヘンリーズフォークリバー（アイダホ州 地図南西部）

川幅40~50mと広いが、水深は深くても腰ぐらいで、対岸まで歩いて渡ることができる。（日本の川では信じられない。）フライフィッシャーの間では、世界一難しい川と言われている。と言うのは、ロケーションが素晴らしい上に生息する魚が大きいので、たくさんの釣り人が訪れ、キャッチしてはリリースを繰り返すため、魚が学習してしまい、人の気配やフライの不自然な流れ方、あるいは捕食されている虫と違ったフライを流したりすると絶対と言っていいほど釣れないのである。逆に釣り人にとっては、自分の技量が試され、チャレンジしたくなる川でもある。



■ ギャラティンリバー（モンタナ州 地図北部）

川幅が5~10mと比較的小規模な川であるが、水がきれいで水温も低く、釣れるマスもたいへんきれいである。映画「River runs through it」の撮影場所になったほどロケーションのよいところす。



(5) ガイドの実際とアメリカ

【7月30日】

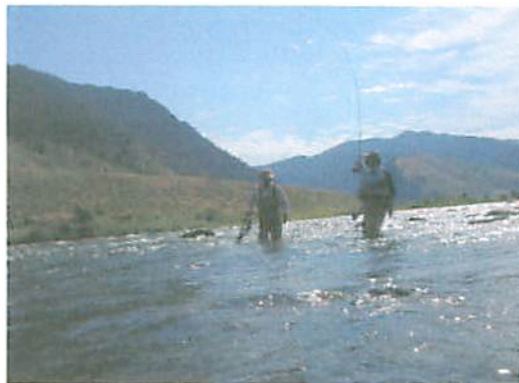
私は、シアトル空港を経由して、12時50分にボーズマン空港に到着した。今回フィッシングガイドとしてお世話になるジミー大森さんは、奥さんを伴って私を出迎えてくれた。握手を求められあいさつをする。自然に握手を求めるあたりは実に「アメリカ」を感じさせた。初対面ながら気さくに話しかけてくれ、徐々に私の不安は薄れていった。早速ガイドの車に乗り込むと、宿泊地のウエストイエローストーンまで2時間強のドライブ。途中昼食をとるためにレストランによる。ウエイトレスへのチップの出し方や特大ハンバーガー（2人で食べてちょうどよいぐらいの大きさだが、アメリカでは普通サイズらしい。）の作り方を面白おかしく教えてくれた。また、標高が高く酸素が薄いことや紫外線が強く、外出するときは注意することなど、細かなアドバイスもしてくれた。

ウエストイエローストーンに到着すると、ホテルにチェックイン。そのときアメリカに入って初めてのネイティブアメリカンのホテルオーナーとの会話となった。簡単なあいさつを交わしただけであったが、「日本語が話せないネイティブ＝（日本語への）逃げ道がない」は、いまだ相当のプレッシャーになってしまうことを残念に思った。その後手作りのパンフレットが手渡された。日本人向けで、旅の情報やレストラン、お土産屋などの地図、フライショップのパンフレットなどが入っていた。さらに、電話のかけ方まで教えてくれた。最新かつ必要十分な情報を提供してくれるところは、やはり「日本人らしさ」を感じさせた。その後の計画については、「長旅の疲れを癒し、明日に備えるか。」それとも「川へいって第一投を投じるか。」の2つを提示してくれた。迷わず後者を選択。早速マティソンリバー（Between Lakes）に向かう。ガイドは竿を出さずにかわらに座り込み、魚の捕食行動を探す。そしてアドバイス。日暮れまでのわずかな時間だったが、数匹のニジマスを釣ることができた。後日、ガイドは初めの数分の動きで私の技量を見抜き、どの川に連れて行こうか、そしてどの程度アドバイスしてやればいいのかなど、さまざまなことを決定していたと語った。



【7月31日】

朝7時30分、ホテルに迎えに来た。ショップにより、免責許諾書にサインを済ませ、マティソンリバーレイノルズバスに向かう。車で45分で到着。ガイドは大きなネットを持って、左岸沿いに川をさかのぼる。ポイントらしき場所を時折のぞきながら淡々と歩く。途中何度かフライを流すが反応はなかった。歩き始めて15分ぐらいの場所でガイドは「ここでライズ（魚の捕食活動）を待ってみる。」と言って茂みに座り込んだ。ライズまでの時間つぶしにと私は魚を探して歩く。と、川の小さなえぐれて大きな魚らしきものが揺らめいているのを見つけた。岸からのキャストは難しいので、遠巻きに川に入り、フライを流す。5・6回ぐらい投げたときにその魚はついにフライをくわえた。大きな手ごたえが手に伝わってくる。魚



と格闘する私を見つけたガイドは、すばやくそばに来てくれた。しかしネットを差し伸べるでもなく、ロッドを支えてくれるでもなく、「存分に魚の引きを堪能してくれ。」と言わんばかりに、魚をかけて興奮している私とは対照的に、冷静に魚の動きを見ていたのである。格闘すること約10分。ついに魚はガイドのネットに納まった。49cmの大きなブラウントラウトだった。



夕食は自由に町のレストランなどで各自とるようになっていたので、ガイドが用意してくれたパンフレットを見てある食堂に入った。3年前に海外に行ったときから英語の必要性を痛感し、今日まで勉強してきた英語を試すときが来たのだ。しかし、真っ先に私の口について出てきた言葉は「Can you speak Japanese?」だった。こんな自然に囲まれた片田舎の食堂に、日本語を話せるアメリカ人などいるはずもないのに……。自信を持って話せるようになるまでは、まだまだ多くの時間が必要だと感じた。

【8月1日】

近くのコンビニからホットドッグを買い、イエローストーンリバーに向けて出発する。イエローストーン国立公園は、火山の噴火によってできた世界初、アメリカ



最大の国立公園である。火山活動は今も続いていて、公園内には多くの間欠泉や温泉などが湧き出ている。また、石灰岩でできたマンモステラスなどの名所も多い。ガイドは、それらを解説してくれながら名所めぐりも楽しませてくれた。さらに、同行者が高校の地学教師であったので、地殻変動などについての質問を矢継ぎ早に浴びせかけた。いろいろなことに興味を示し、また広い分野において豊富な知識を持っていることにも感心させられた。

国立公園の西のゲートをくぐってすでに2時間ほど走っていたが、まだまだ公園は続くらしかった。聞くところによるとこの国立公園は四国の約半分の大きさだそうで、改めてアメリカの大きさを感じた。

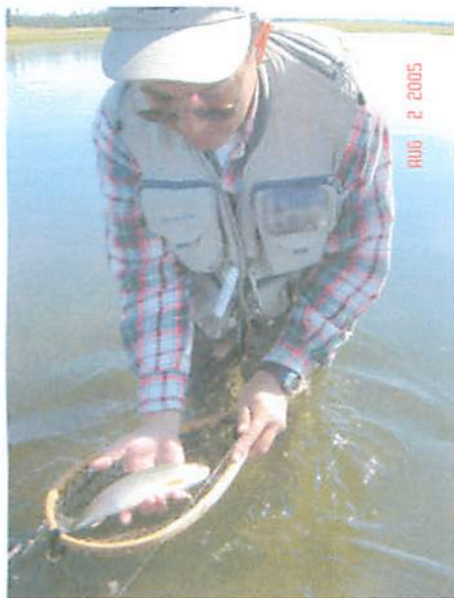
そして夕食。昨日のショックが大きかったのと、遅い時間で開いている店が少なかったのとで、今日の夕食はケンタッキーフライドチキンにねらいを定めた。実は、ケンタッキーなら日本とメニューも変わらず、オーダーもそれほど話をする必要もなかろうと考えたからだった。ところがその考えは甘かった。店員が私に尋ねていることがほとんど聞き取れなかったのだ。さらに注文したものと出されたものが違っていた。私たちは、はっきりと話すイギリス英語に慣れ、単語と単語をつなげるように話すアメリカ英語に慣れていなかったのだ。今回の失敗もショックだったが、課題は「英語耳を作る」ことだとわかったことは収穫だと思った。

【8月2日】

今日は、夢にまで見た憧れのヘンリーズフォークリバー。世界で最も賢いマスたちがすんでいると言われる川である。難しい川でいかにしてゲストに満足感を与えられるか、この川こそまさにガイドの技量が問われる川と言える。

車を置いた場所からポイントまで約2km。川に沿って30分の歩きを強いられた。途中1週間前に魚の姿を見つけたというポイントに立ち寄った以外は、まっすぐに目指すポイントに向かう。今の時期は水量が減り、なかなか魚は姿を見せないのだそうで、ポイントは川に足しげく通わなければ見つからないとのこと。今日向かうポイントは100%とはいえないまでも、確率は高いのだそうだ。

ポイントに到着。まもなく川幅100mの中央付近でライズリング（魚の捕食活動）が広がった。ガイドはそれを見てほっと胸をなでおろしていたようだった。ガイドはこんなことを話した。「明日行く川で、魚たちは姿を見せてくれるか、ゲストを満足させることができるのかと心配で眠れなくなることがある。」と。意外だった。いくつもの川を見、多くの情報を手に入れているガイドは、自信满满ではないのかと。しかし、ある意味どんな仕事であれ、この緊張感を失ってしまっ



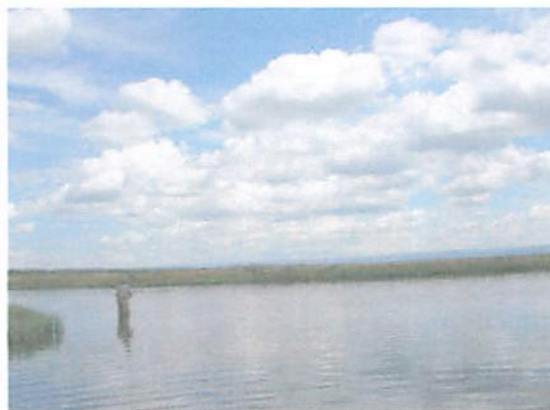
の緊張感を失ってしまっ

か。不安や緊張感があるからこそ真剣に仕事に取り組み、さらに上を目指して精進するのであらうと思われた。と同時に、教育者である自分も、経験から来るある種の怠慢に埋もれることなく、日々不安と緊張感を持って取り組んで行こうと思った。

今年から日本人を案内するようになったガイドに、アメリカ人と日本人をガイドするのに違いはあるのか尋ねてみた。答えは全く違うということだった。日本人ゲストは、遠くアメリカまでやってくるぐらいだから釣りに相当入れ込んでいる。ガイドの仕事は、言ってみればライズポイントに案内するまでで、あとは放っておくのだそうだ。それ以降はゲスト自身のスタイルで釣りをさせるのだ。自分を振り返ってもそれは納得がいく。「流れの筋がこうだから、フライはこう流せ。」だとか「この川ではこのフライが当たりフライだから、おれのを使え。」だのと指図されたくない。自分の経験と考えると、自分なりの釣りで試したいと思うのだ。それで釣れなかったら次の手を考える。そこがおもしろいのだ。しかし、アメリカ人は違う。これまでガイドしてきたアメリカ人は、初心者や高齢のために目が見えにくくなったり、指が思うように動かなくなったりした老人が多かったのだそうだ。そのため、ガイドに

は自分の手となり足となり、また目となって動いてくれることを期待してくると言う。なるほど、そこまでやるかと改めてアウトドアの国アメリカと思わずにはいられなかった。

釣果はというと、さすが世界一と言われるだけあって何とか30cm弱の魚はキャッチできたものの、ほとんど魚にもてあそばされるという結果に終わった。しかし、帰りに見た空はとてつもなく大きく、そして清々しかった。

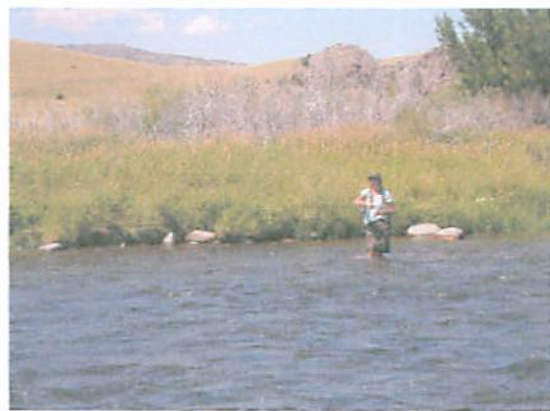


【8月3・4日】

今日は、マティソンリバーでのフロートトリップ。初体験である。今日の天気も雲ひとつない日本晴れ、いやアメリカ晴れ？である。川の流は濁りもなくどこまでも澄んでいた。入川場所まで車でボートを引っ張って移動し、そこからボートで12km先まで釣り下る。残された車はというと、そこはアウトドアの国アメリカ。車を上陸場所まで移動するビジネスがしっかりとあるのだ。私が出発する前に、すでに数十隻のボートがスタートしていると言う。川の流れに乗って釣り下る。忙しい釣りと思いきや何と気分のいい釣りなのだろう。ガツガツ釣らずにのんびりとした気分で釣りができる。普段は見ることのない回りの景色まで満喫する余裕すら持てるのである。



ガイドの操舵テクニックはすばらしく、私のニーズに応えながら右に左に移動した。何艘ものボートと抜き抜かれつしながら釣り下っていった。途中、中学生ぐらいの女の子が川に入ってフライフィッシングを楽しんでいた。すれ違いざま、彼女は、「Hi there」とあいさつしてきた。見ず知らずの私たちに。さも親しげに。単純に感動した。オープンな国民性。懐の深さなるものを痛感させられた。日本人にもほしいなあ。



【8月5日】

楽しかったアメリカでの滞在もついに終わりの時を迎えた。実を言うとアメリカに着いた日まで帰国するのは5日と思い込んでいた。と言うよりその予定で飛行機も申し込んだつもりでいた。しかし、アメリカに着いた初日に帰りの飛行機のチケットを見て青ざめてしまった。8月5日は現地の日付で、その日は日本の6日だったのだ。(時差を計算に入れていなかった。)結局は1日滞在を

延長する形になってしまった。

しかし、今日は空港近くのホテルまで釣りをしながら向かうという、これまたすばらしい一日となった。川はギャラティンリバー。道路に沿って流れている。川幅はそれほど広くないが、水は澄んでいて冷たく、そこに泳ぐニジマスもすばらしく美しかった。



(6) 研修を終えて

今回ジミー大森というフィッシングガイドと1週間行動をともにすることで、いろいろなことを学ぶことができた。最も印象的だったのは、ガイドという仕事に対する彼の姿勢である。人間1週間も一緒にいると、親しみもわけばある種の「慣れ」も生じてくる。すると横柄な態度をとってみたり、自分の考えを押し付けようとしたりするものである。しかしそのような態度は全く見られなかった。ゲストの要望に最後まで応え、満足が得られるようにと全力で尽くしてくれた。後日、再会する機会を得たが、そのときに「今シーズンは仕事で70日間川に出たが、最後は疲れて吐いてしまった。」と笑いながら話してくれた。こんな話からも彼の仕事に対する真摯な態度がうかがわれる。これまでの自分の生き方を再度考えさせてくれるような人間に出会えたことを幸せに思った。

また、今回の研修地は海外ということだったが、日本を離れ、違う文化圏に出て行くこと自体が大きな研修になったと思う。最近交通機関の発達で海外は身近になったと言われるが、まだまだ精神的には遠いものとの観がぬぐえない。自分を太らせる



にはどんどん外に出て行くことが必要であると今回強く思わされた。そのためには英会話の一層のスキルアップがこれからの最重要課題であると痛感した。ネイティブの前に出ると未だに萎縮してしまうのは、英会話力に自信が持てないからに他ならない。もっと自由に話せたら、もっとたくさんのことを見ることができたかもしれない。今後もより一層精進して、世界を見に行きたいと思う。